

Teacher Training Lessons to Acquire Social Perspectives and Ideas : How Do Students Read Current Issues?

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-12-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村井, 大介 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00026956

社会的な見方・考え方を身につける教員養成の授業実践

—学生は如何にして時事問題を読み解くのか—

Teacher Training Lessons to Acquire Social Perspectives and Ideas :
How Do Students Read Current Issues?

村井 大介¹

Daisuke Murai

（令和元年 12 月 2 日受理）

1. 本研究の目的と問題の所在

1.1. 本研究の目的

本研究の目的は、社会科教師としての実践習慣を身につけることを念頭におきながら、学生・教員が社会的な見方・考え方を働かせて時事問題を読み解く教員養成・教員研修での活動を開発し、その意義と効果、課題を明らかにすることである。

本研究は、新学習指導要領への対応を考えるという表面的なものではなく、探究する問題の基底には、社会科教師の形成している身体文化そのものを考察し、教員養成へと結び付けていくということがある。そのため、問題の所在を、先行研究の文脈、及び、学習指導要領の改訂という社会系教科教育の動向の文脈から論じることとする。

1.2. 先行研究の視点からの転換

社会科の教員養成及び教師教育に関する研究については、近年、実証的な検証を踏まえた研究が数多くなされてきている。例えば、田口・溝口・田宮（2009）及び溝口・田口・田宮（2010）の一連の研究では、「社会科授業実践力診断カルテ」の活用と検証を通して、実践的な力量形成を実現する教員研修モデルカリキュラムの開発が行われている。角田（2013）は、教師のゲートキーピングに着目しながら、小学校教員養成における社会科授業構成能力の育成の手立てについて自らの実践を示している。棚橋・渡邊・大坂・草原（2014）は、教員志望学生の社会科授業プランになぜ違いが生じるのかを分析し、①学生の持っている教科観をじっくり省察させること、②講義を通して形成したい教科観を（再）構築させること、③複数の授業理論の批判と納得を介して構築された教科観にもとづいて授業プランを作成させること、というプロセスが学生の授業構成能力を高める上で重要になることを明らかにしている。川口（2014）は、高校日本史カリキュラムの開発共同研究を事例としながら、教師が「カリキュラム・ユーザー」から脱却し、主体的にカリキュラムデザインを行う「カリキュラム・ディベロッパー」「カリキュラム・メーカー」となるような社会系教科カリキュラム設計方法論を提起している。草原・

¹ 社会科教育系列

岡田ら（2016）では、社会科教師の課題分析と課題解決を支援するハンドブックとその活用の仕方について、質問紙調査と聞き取り調査も踏まえて検証し、教員養成及び教員研修の場面の有効性を明らかにしている。

以上で取り上げたこの 10 年間の研究動向からも明らかなように、実証的な検証も踏まえた社会科の教員養成及び現職教員の力量形成に関する研究が行われている。こうした研究の成果として、授業構成能力の育成や教員としての主体的なカリキュラムデザインが大きく前進してきたとみることができる。

上記で取り上げた研究から、従来の社会科の教員養成・教師教育に関する研究が自明にしている共通点を二つあげることができる。

第一に、社会科授業実践力の診断やカリキュラムデザインなど、一連の授業やカリキュラムを計画し、実行し、評価、改善していくような、社会科教師としての教育行為の場面を中核にしていることである。

第二に、社会科授業実践力や授業構成能力といったキーワードが示すように、教員養成や現職教員の研修については、力量や能力といった「力」をベースに語られてきたことである。

以上の二つの傾向は、この 10 年間のことだけではなく、それ以前も同様であったと考えられる。このことは、社会科の教員養成に関する研究動向をレビューした松尾（2001）の論稿からもうかがうことができる。松尾（2001, p.167）は、社会科の教員養成に関する研究動向をまとめるなかで、「良き社会科教師を育成するためには、学生や現職教師らに、より質の高い社会科の授業を創造する力を、すなわち、社会科授業構成能力を育成しなければならない。それを日頃の講義、演習、教育実習等で育成する必要がある」（傍点は引用者による）と論じている。当たり前のことではあるが、大学での教員養成は、大学での講義や演習、教育実習という教育活動の一環の中で、社会科の授業を構想し実践する力の育成が図られてきたわけである。

この二つの傾向は、教員養成、さらには、教員研修の中核となる見方であることは疑う余地もなく、今後も重要になり続けるだろう。ただし、この二つの傾向を前提として、教員養成・教員研修が語られることで、不問にふされ、周縁におかれ、盲点になり続けてきたことがある。それは、教員を志望する学生や現職教員が、教員以前の日常の生活者として、どのように社会を捉えているのかということである。こうした日常生活者としての営みと「教員」としての教育行為をつなぐ回路については、あまり意識が向けられてこなかったのではないだろうか。

こうした疑問から本研究では、従来の教員養成・教員研修が前提としていた枠組みを、次の二つの方向にずらした視点の可能性を探究することを試みる。

第一に、教員養成・教員研修の対象を、授業やカリキュラムを計画し、実行し、評価、改善していく「教員」としての教育行為に限定するのではなく、日常生活に埋め込まれた学習機会にまで広げていくことである。つまり、教育行為に限定せずに、日常の社会行為に着目し、日常の社会行為を教育行為へとつなげていく視点をもつことである。

第二に、力ではなく、習慣に焦点を当てることである。力が「できたか／できなかったか」を評価する視点であるとすれば、習慣は「しているか／していないか」という日常生活のルーティンの中での継続性についての視点である。こうした習慣に着目するのは、日常生活でのルーティンに埋め込まれた行為を、社会科の授業実践へとつなげていく実践習慣を形成することに重点をおくためである。

先行研究の視点からの移行については、図1のようにまとめることができる。従来の教員養成・教員研修においても日常生活とのつながりや習慣の形成といった側面が全くなかったわけではないだろう。そのため、本研究で提起するのは、従来の教員養成・教員研修に対立する視点を提起するというよりかは、従来よりも範疇を広げながら重点をずらすことに近いといえる。このような視点の移行は、社会科教師としての実践習慣に着目していくことに他ならない。以上のような従来の枠組みとは異なり、日常生活での実践習慣に重点をおいた教員養成・教員研修の理論と可能性を明らかにすることを、本研究の第一の課題とする。

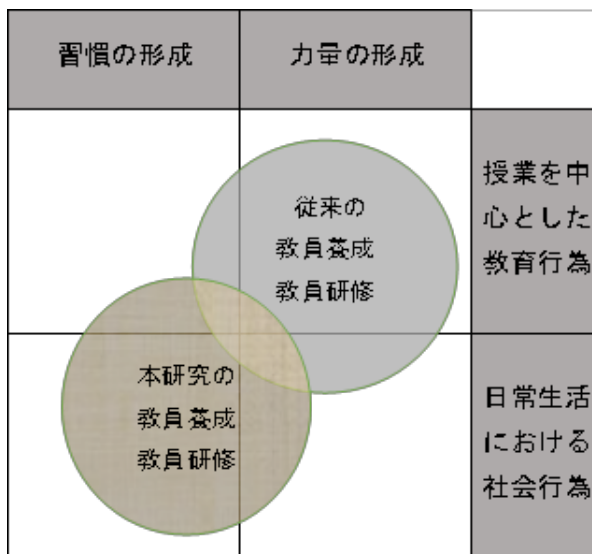


図1 教員養成・教員研修の枠組み

1.3. 現在の社会科教育における問題の所在

2017年・18年に告示された新学習指導要領では、社会的な見方・考え方を働かせながら資質・能力を育成する社会系教科の教育課程が示された。こうした改訂の動向は、社会の課題を探究し社会を構想する授業につながるものであり、社会系教科の授業のあり方を大きく変える可能性を有している。

表1・表2は、それぞれ小学校学習指導要領「社会」、中学校学習指導要領「社会」の本文に出てくる語句の出現回数を示したものである。

版によって全体の記述量が異なるため一概には比較できないが、2017年版は、「理解」という語句だけではなく、「考察」や「表現」、「解決」、「追究」という語句の出現回数が大きく増えている。このことは、社会科が何をなす教科であるのかについて変容してきていることを示しており、社会科が単に社会事象について理解するだけに留まる教科ではなくなったことを意味している。つまり、内容（コンテンツ）だけではなく、能力（コンピテンシー）の育成も一層重視するようになったことを示しているといえる。

こうした変化の一方で、改訂の成否を左右するような根本的な問題として、次の二つをあげることができる。第一に、社会的な見方・考え方を働かせる授業を実践できる教員の養成をどのように実現するのか、という問題である。

表1 小学校学習指導要領「社会」の語句の推移

	89年版	98年版	08年版	17年版
理解	56	17	17	63
考える	17	18	21	65
表現	1	4	4	50
解決	0	0	0	35
追究	0	0	0	23

表2 中学校学習指導要領「社会」の語句の推移

	89年版	98年版	08年版	17年版
理解	101	69	64	76
考察	6	9	19	69
表現	0	3	7	59
解決	0	2	4	42
追究	0	9	5	36

例えば、中学校の社会科の目標については、「社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎」を育成することが掲げられている。

しかしながら、そもそも社会科を教える教師は、日常生活の中で社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を行っているのだろうか。そもそも教師自身が社会的な見方・考え方を身につけていなければ、社会的な見方・考え方を働かせる授業を構成することは難しいと考えられる。

そのため、社会的な見方・考え方を身につける教員養成・教員研修で活用できる実践を提案することを、本研究の第二の課題とする。

新学習指導要領の提起する社会的な見方・考え方に内在する第二の問題は、そもそも社会的な見方・考え方を働かせるとはどのようなことであり、このことが学習者の日常生活での社会認識に何をもたらさうのかという、学習そのものにかんする問題である。社会科を教室だけの学びにしないためには、日常生活での社会行為と学習をつなげていくことが重要になる。前項「1.2」で論じたことにも関連するが、教員を志望する学生や現職教員にとっても、学習場面だけではなく、日常生活とのつながりから社会的な見方・考え方を捉えていくことが必要になるのではないだろうか。

このことを追究するために、大学生が如何にして社会的な見方・考え方を働かせながら時事問題を読み解くのかを明らかにすることを、本研究の第三の課題とする。

1.4. 本研究の方法と構成

本研究では、上記の問題の所在で論じた三つの研究課題を明らかにするために、実践習慣に着目した教員養成・教員研修の理論的根拠を示した上で、社会的な見方・考え方を身につける教員養成・教員研修の実践を提案し、その効果と課題を分析することを方法とする。

具体的には、「2」では、従来の枠組みとは異なり、日常生活での実践習慣に重点をおいた教員養成・教員研修の理論とその可能性を明らかにするという本研究の第一の課題を探究し、実践習慣に着目した教員養成・教員研修の理論的根拠を示す。「3」では、本研究の第二の課題を探究し、教員養成・教員研修の場で実践できる、社会的な見方・考え方を身につける活動を提案する。「4」では、本研究の第三の研究課題に応えるために、「3」の活動の実践から大学生が如何にして社会的な見方・考え方を働かせながら時事問題を読み解くのかを明らかにする。以上から、本研究の目的で示したとおり、学生・教員が社会的な見方・考え方を働かせて時事問題を読み解く教員養成・教員研修での活動を開発し、その意義と効果、課題を明らかにする。

2. 社会科教師の実践習慣に着目する意義—本研究の理論的背景

ここでは、教員養成の可能性として、実践習慣の形成について考察する。本研究では、日常の中で自覚的に繰り返し行うことを志向する習慣を、「実践習慣」と呼ぶことにする¹。

ある教師を他の教師よりも優れた教師として卓越化させているものは何かを考えると、「優れた教師」として参照されることのある教師は、他の教師とは異なる自らの実践習慣を自覚している場合がある。ここでは一例として、小学校の社会科の実践者として知られる、有田和正氏を取り上げる。有田和正氏の著作が読まれ続けているのは、有田氏が他の教師とは異なり、

卓越する何かを持っており、それを自覚していたからに他ならない。

有田（2009, pp.9-10）は、「教え上手」とはわかりやすく、そして教わる人に学びたいと思わせる「技術」を持ち、かつ、彼らを思いやるような心とユーモアを備えた「人間性」を持つ人のこと」を指すとしたうえで、「自ら伸びようとする”姿勢や考えを身につけさせること”の必要性を唱え、自らのエートスを表明している。

また、有田（2015）では、「逆思考の訓練をせよ」（固定観念を捨てるために逆のことを考える）、「常に複数のテーマを追究せよ」「現地主義をつらぬけ」「本や新聞の読み方を工夫せよ」「一人の子どもを思い浮かべよ」「見る目とセンスをみがけ」「すべてのものを「師」にせよ」といった、自らが身体化してきた実践習慣を紹介している。

例えば、「常に複数のテーマを追究せよ」ということについては、「常に問題意識をもて」という項目の中で、「教材を発掘していく人間であるためには、常に、何らかの問題をもち、それを常に考えていることである。毎日続けるためには、考える時間と場所を決めておくのもよい」と論じている（有田, 2015, p.34）。また、「常にメモ用紙をもて」という項目では、「教材を発掘するためには、広くヒントを集めることが大切だ。多くのヒントを集め、それをあたためることから、よい教材が発掘できる」と記している（有田, 2015, p.38）。

このようにいくつかの例から、常に教材を発掘し続けるという、有田和正氏が社会科教師として身につけてきた実践習慣を汲み取ることができる。そして、有田和正氏にとっては、社会科教師としての学びの場が、日常生活のあらゆる場面に埋め込まれていたことを理解することができる。つまり、有田(2015)が自らの経験をもとに提起しているのは、社会科教師として日常生活のルーティンの中で絶えず行ってきた実践習慣であるといえる。日常生活の中での社会行為を社会科の授業という教育行為へと結び付けていく思考様式を身体化してきたとみることができる。

以上のように、実践習慣に着目することは、ある教師が他の教師よりもなぜ優れた実践をすることができるのかを理解し、自らの日常生活での振る舞いを捉え直して、卓越した教師へと変容する可能性を有している。有田（2015）が提起しているのは、授業にもつながる社会科教師としての学びの場が、日常生活のあらゆる場面に埋め込まれているということであった。卓越した社会科教師は、こうした日常生活での社会行為を授業という教育行為へと結び付ける実践習慣を形成していた。したがって、これらのことを自覚しながら社会科の授業の開発にもつながるような実践習慣を日常生活の中でも身につけていくことは、学び続ける社会科教師になることにつながると考えられる。

3. 社会的な見方・考え方を身につける教員養成・教員研修の実践開発

それではどのようにすれば社会科の授業の開発にもつながるような実践習慣を形成することができるのだろうか。教員養成・教員研修にどのように応用しうるのかについて考察してみたい。ここでは日常生活の中で繰り返し行っている社会行為として、ニュースを読むという行為に着目する。

ニュースを読むという行為は、メディアを通して、社会を認識する行為である。日常生活の中で反復的に行っているこの社会行為は、社会科教師にとっては、そのまま授業という教育行為へもつながるものである。実際に、NIE（Newspaper in Education）での実践をはじめ、ニュースをもとに、その時々時事問題を教材にした授業実践がこれまでも開発されてきた。

しかしながら、ニュースを読むという行為は、必ずしも自覚的に教育行為へと結びつけられているわけではない。このことは『小学校社会科授業の実態調査に関する研究』（坂井俊樹研究代表）の調査結果からもうかがうことができる。この調査では、2009年に東京都を中心とした小学校教員へ質問紙調査を実施し、353の回答を得ている。「あなたが社会科の授業に対する準備として普段行っていることについてお尋ねします」という質問に対して、「(1)新聞・雑誌の切り抜き」についての回答は、「いつも行っている」は3.2%、「しばしば行っている」は19.2%、「時々行っている」は31.5%、「あまり行っていない」は35.3%、「全く行っていない」は10.4%であった。同様に、「(2)テレビ番組の録画」についての回答は、「いつも行っている」は3.2%、「しばしば行っている」は14.6%、「時々行っている」は26.8%、「あまり行っていない」は35.6%、「全く行っていない」は19.8%であった。これらの点は、新聞やテレビといったメディアからの情報を授業へと活用している教員は半数程度であることを示している。そのため、ニュースを読み、教育場面へとつなげていく実践習慣は、必ずしも形成されているわけではない。

教育行為へとつなげていくことを意図した場合、どのようなニュースの読み方が、社会科の教師として相応しい、授業につながるようなニュースの読み方になるのかを考えていく必要がある。ここでは、新学習指導要領の提起する社会的な見方・考え方を働かせることに着目する。

「1」で論じたように、新学習指導要領では、「社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して」学習することを重視している。しかし、根本的な問題として、そもそも教師自身が普段から社会的な見方・考え方を働かせていない可能性があることを指摘した。そのため、ここでは社会的な見方・考え方を働かせながらニュースを読み解くという実践習慣を形成することを目的とした教員養成・教員研修の活動を提案する。

本研究で提案するのは、図2の「社会的な見方・考え方を活用しながらニュースを読み解く教材開発シート」をもとに、毎日のニュースを読むという活動である。図2の項目の中にある「関連する見方・考え方の視点」とは、2016年8月26日に「教育課程部会 社会・地理歴史・公民ワーキンググループ」によって示された「審議の取りまとめ」に関連する資料6「社会的な見方・考え方を働かせたイメージの例」によって提示された「考えられる視点例」である。この視点の例については、表3に提示した。ここでは、ニュースという点から公民教育（社会科公民的分野及び公民科）で例示されていた視点（「現代社会の見方・考え方」及び「人間と社会の在り方についての見方・考え方」）を中心に上げているが、「社会的事象の地理的な見方・考え方」や「社会的事象の歴史的な見方・考え方」の視点からニュースを捉えることもできるだろう。

このワークシートの内容は、表3の見方・考え方の視点と結び付けながらニュースを読解した上で、そのニュースを教材としてどのように取り上げることができるのかを考察する内容になっている。このワークシートの特徴として、次の点をあげることができる。

第一に、反復して行えることである。教員養成や教員研修の場で繰り返し行うことのできる活動である。反復して行うことは、「2」でも論じたように、社会科教師としての実践習慣を身につけることにもつながると考えられる。授業時間の空き時間や、授業時間外の課題など、教員養成の授業の様々な場面で取り入れることのできる活動である。

第二に、日常生活の中でも行えることである。このワークシートの活動は、教員養成や教員研修の場から離れても、毎日の生活の中で行うことができる。そのため、教員養成の授業や研修が終了したあとも、一人で継続して行うことができる。継続して行うことで、日常におけ

「社会的な見方・考え方」を活用しながらニュースを読み解く教材開発シート

新聞記事の 発行年月日	年 月 日	新聞社/ 記事掲載頁	新聞 頁
記事見出し			
記事の概要			
関連する見方・ 考え方の視点			
見方・考え方 の視点との 関連性 (見方・考え 方を働かせ てどのよう なことが考 えられるか)			
授業で扱え る単元			
児童・生徒と の関係性			
記事の内容 からつかま せたいこと			
授業で考え られる発問			

図2 社会的な見方・考え方を身につける教員養成・教員研修のワークシート例

表3 関連する見方・考え方の視点の例

公民的 分野	現代社会を捉える視点	対立と合意、効率と公正、個人の尊重、自由、平等、選択、配分、法的安定性、多様性 など
	社会に見られる課題の解決を構想する視点	対立と合意、効率と公正、民主主義、自由・権利と責任・義務、財源の確保と配分、利便性と安全性、国際協調、持続可能性 など
公共	人間と社会の在り方を捉える視点	幸福、正義、公正、個人の尊厳、自由、平等、寛容、委任、希少性、機会費用、利便性と安全性、多様性と共通性 など
	公共的な空間に見られる課題の解決を構想する視点	幸福、正義、公正、協働関係の共時性と通時性、比較衡量、相互承認、適正な手続き、民主主義、自由・権利と責任・義務、平等、財源の確保と配分、平和、持続可能性 など
倫理	人間としての在り方生き方を捉える視点	善悪、生死、徳、愛、共感、幸福、義務、正義、個人の尊厳、公正、寛容、存在、真理、聖、美 など
	現代の倫理的諸課題の解決を構想する視点	尊重、畏敬、創造、保全、自由、権利、責任、自立、協働、勤労、多様性、相互承認、平和、国際協調、持続可能性 など
政治 ・ 経済	社会の在り方を捉える視点	個人の尊厳、効率、公正、自由、平等、委任、希少性、機会費用、選択、配分、分業、交換、利便性と安全性、多様性と共通性など
	社会に見られる課題の解決を構想する視点	対立、協調、効率、公正、比較衡量、具体的な妥当性と法的安定性、相互承認、適正な手続き、民主主義、自由・権利と責任・義務、財源の確保と配分、平和、持続可能性 など

(社会・地理歴史・公民ワーキンググループによる「審議の取りまとめ」資料をもとに、筆者作成)

る社会行為の文脈を、教育行為へとつなげていくことができるようになると考えられる。

第三に、どのような社会的な見方・考え方の視点が、どのように取り上げるニュースと関連しているのかを考えることができる点である。このことは、児童・生徒に求めていくような、社会的な見方・考え方を働かせることが、実社会・実生活の中でどのような意味を持つのかを、教師自身が理解することにもつながるだろう。このワークシートでは、関連する見方・考え方の視点を二つ記入できるようにしている。これにより複数の視点から新聞記事の内容を掘り下げていくことができる。

第四に、日常生活でのニュースを読むという社会行為を、授業という教育行為へとつなげていく思考回路を築くことができる点である。こうした思考の回路を築けるように、「授業で扱える単元」「児童・生徒との関係性」「記事の内容からつかませたいこと」「授業で考えられる発問」の各項目を設けている。教員養成の段階では、実際の児童・生徒の姿を想定することは難しい。しかしながら、個別具体的な児童・生徒の実態から、授業を構想できるようになるためにも、児童・生徒にとって、どのような意味のあるニュースであるのかを考察することは重要であると考えられる。

第五に、特定の内容やメディアに限定せずにニュースを選択でき、教材発掘の可能性が広く開かれている点である。田口・溝口・上谷(2015)の調査では、大学生(182名)の回答したもっとも身近な情報源は、携帯・スマホは52%、テレビは40%、PC・タブレットは5%、新聞は1%であったことを明らかにしている。このように人によって身近な情報源は異なり、教員志望の学生にとっては新聞よりも携帯・スマートフォンの方が身近なメディアになってきている。学生の新聞離れが危惧される一方で、テレビやインターネット上のニュースサイトは、新聞よ

りも情報ははやく入手できるため、それぞれのメディアの特性に応じたニュースの読み方が重要になってきている。上記のワークシートは、「新聞記事の発行年月日」「新聞社／記事掲載頁」を記載する欄があり、新聞を前提にしている。しかしながら、「新聞記事の発行年月日」を「情報の発信年月日」、「新聞社／記事掲載頁」を「情報の発信源」に読みかえれば、情報を入手したメディアにかかわらず、ニュースを視聴する際に活用することができる。自分の身近な情報源から、興味をもった内容のニュースを選択できるため、自分の習慣にあった教材研究の仕方を身につけることができる。

第六に、ワークシートを活用することで、社会的な見方・考え方を働かせながら時事問題を読み解き、教材化していく過程をメタ認知することができる点である。子どもの学習場面においても思考を可視化しルーティン化することの重要性が提唱されてきている²。この教員養成・教員研修の実践では、ワークシートを活用することで、思考を可視化することができる。また、ワークシートを、対話をするツールとして用いることで、同一のニュースを分析した場合であっても、働かせる見方・考え方や、教材に結びつける視点が人によって異なることに気付くことができると考えられる。

以上が、図2で示した「社会的な見方・考え方」を活用しながらニュースを読み解く教材開発シートの特徴である。このワークシートは、教員養成・教員研修を前提に作成したが、「社会的な見方・考え方」を活用しながらニュースを読み解く活動そのものについては、児童・生徒にとっても有効である。村井(2018)では、こうした活動を児童・生徒に行う意義と、児童・生徒むけのワークシートを提示しており、そこでは児童・生徒が社会への希望を持てるようにする視点を重視している。しかしながら、村井(2018)では、ワークシートを実際に活用した活動を分析することはできておらず、その効果と課題については明らかにされていない。そのため、本稿では、図2のワークシートを活用した活動を分析し、効果と課題を明らかにする。

4. 開発したワークシートを用いた教員養成での活動とその効果

4.1. 教員養成の授業での実践の概要

ここでは、教員養成課程での授業で図2のワークシートを活用した事例を取り上げる。ここで取り上げるのは、2018年に筆者が担当した、X大学教育学部の3年次を対象にした「社会科教育法IV(公民教育)」の授業である。この授業は、中学校社会科・公民科の教育職員免許状の取得を希望する学生37名が履修した。学生は、3年次の6月に教育実習へ行っている。今回、活動を行った10月は、介護等体験に行く学生もいるため、欠席する学生が比較的多い状況になっていた。この授業では、3人から4人のグループをつくり、活動を多く取り入れながら学習した。以下の学生A1～K3について、同じアルファベットの学生は、同じグループであることを示している。

当該授業では、「中学校社会科・高等学校公民科の教員として必要な教科指導力を身につけること」を目標にしており、「現代社会の見方・考え方」を意識しながら、現代社会の諸課題を教材化することができるようになることや、「社会科・公民科を担当する教師に求められる力量や授業を実践する際に重要になるポイントについて自分自身の考えをもつことができる」ようになることを目指していた。こうした目標を達成するために、ニュースを読み解く活動を行うことは有効であると考えられたため、授業時間内に図2のワークシートを活用した実践を2回行った。

初回の授業では、最初に「社会科は社会を（について）〇〇する教科である」の〇〇にあたる動詞を自由に考えてもらった。「理解」や「考察」、「創造」といった動詞が複数みられた。こうした記述の内容から各学生の社会科観をうかがうことができる（各学生の記述内容については、表4の「社会科は社会を「〇〇」する教科」の欄を参照）。

第2回目の授業（2018年10月10日）では、学習指導要領の改訂の動向を確認した上で、ワークシートを用いた1回目の活動を行った。各グループに1紙、新聞を配布し、グループで好きな記事を選び、議論しながら、社会的な見方・考え方の視点から分析し、授業に結び付ける作業を30分ほど行った。各グループが選択した記事と、分析に用いた見方・考え方の視点については、表4の通りである。授業日の朝に筆者が入手することのできた5社（朝日新聞、静岡新聞、日本経済新聞、毎日新聞、読売新聞）の新聞（2018年10月10日付）をもとにしている。進学や就職、労働、待機児童など、自分自身のキャリアとも関連の深い新聞記事が選ばれていた。社会的な見方・考え方の視点と結び付けながら読み解くことに躊躇する学生も見られたが、グループで協力することで、複数の視点と結び付けながら考察を深めることのできたグループが複数みられた。

第3回目（2018年10月17日）の授業は、筆者が選定した2つの記事【新聞記事A】と【新聞記事B】を配布し、ワークシートを活用した2回目の活動を行った。

【新聞記事A】は、「配車アプリ競争激化 タクシー到着時刻料金もわかる」という見出しの読売新聞（2018年8月19日朝刊）の記事である。この記事は、スマートフォンのアプリを使ったタクシーの配車サービス競争が激化していることを、複数のタクシー会社や企業の取り組みをあげながら説明していた。

【新聞記事B】は、「台湾規制強化を商機に サトウキビストロー、竹の皿 代替品開発活況」という見出しの毎日新聞（2018年8月19日朝刊）の記事である。この記事は、2018年2月に台湾環境保護署（環境省）が、プラスチックごみによる海洋汚染問題を受けて、2030年までに汚染の主要因とされるプラスチック製のストロー、レジ袋、コップ、食器の使用を全面的に禁止すると発表した結果、プラスチックに代替する商品として、サトウキビストローや、竹の皿が開発されたことを説明していた。

この二つの記事は、次の三つの理由から選定した。第一に、【新聞記事A】は、これからの社会の情報化や人工知能（AI）のあり方、【新聞記事B】は、ESD（Education for Sustainable Development, 持続可能な開発のための教育）とも関連の深いこれからの社会のプラスチックのあり方にかんする問題を扱っており、今後も継続的に課題になる事象であるためである。第二に、記事中に「利便性」（新聞記事A）、「需要」（新聞記事A）、「規制強化」（新聞記事B）、「環境」（新聞記事B）といった複数のキーワードが見られ、複数の視点から考察できると考えたからである。第三に、これらの記事は、筆者が2018年8月に担当した教育職員免許状更新講習の授業時に、現職教員が実際に新聞から選択して分析した記事であり、学生にとっても分析しやすい記事であると考えたためである。

教員養成の学生に行った授業では、2つの記事【新聞記事A】と【新聞記事B】を配布し、グループを2つに分けて、ペア、もしくは、個人で、ワークシートをもとにニュースを授業へと結び付ける活動を行った。30分間ほど作業を行い、それぞれの内容についてグループ内で紹介し合う時間を設けた。各学生の分析した記事と関連づけた社会的な見方・考え方の視点については、表4の通りである。

表4 教員養成の授業での活動の結果

学生	社会科は社会を「〇〇」する教科	1回目の活動(10月10日)		2回目の活動(10月17日)	
		選択した記事	見方・考え方	選択した記事	見方・考え方
A1	豊かに	各地で「災害級」の猛暑	持続可能性, 国際協調, 利便性と安全性, 自由・権利と責任・義務	【新聞記事A】	利便性と安全性, 共同・協調
A2	勉強			【新聞記事B】	
A3	生き抜く力を養成				
A4	理解				
B1	改善	新卒一括採用転機に経団連ルール廃止発表	対立と合意, 自由, 平等, 勤労, 権利, 効率と公正, 選択, 多様性	【新聞記事A】	効率, 創造
B2	知る			【新聞記事B】	
B3	学び合いを				
B4	平和で民主的に				
C1	研究・理解・考える・実践	「女が大学なんて」言わせない	公正, 平等, 個人の尊重, 選択, 効率と公正	【新聞記事A】	対立, 利便性
C2	開発			【新聞記事B】	
C3	自分のこととして考える				
C4	認識しその在り方を理解				
D1	追究	女子が上 2都府のみ(4年制大学の進学率)	公正, 自由・権利と責任, 個人の尊重・尊厳, 平等, 選択	【新聞記事A】	効率, 対立
D2	理解			【新聞記事B】	
D3	創造				
D4	働きかける				
E1	見ることができる力を養う	企業 56% パワハラ規定	個人の尊厳	【新聞記事A】	利便性と安全性, 機会費用
E2	学習			【新聞記事B】	
E3	形成する一員を育てる				
F1	(欠席)	終わらない「歴史」摩擦	対立と合意	【新聞記事A】	利便性と安全性, 対立と合意
F2	創造			【新聞記事B】	
F3	思考			(欠席)	
G1	恋(好きになる)	相続 男性の半分(チュニジアの相続制度)	平等, 個人の尊厳, 公正	【新聞記事A】	利便性と安全性, 交換
G2	追求			【新聞記事B】	
G3	客観(主観はしない)				
H1	分析	企業 56% パワハラ規定—調査機関「さらに整備を」	勤労, 権利, 個人の尊重	【新聞記事A】	利便性と安全性, 効率
H2	(欠席)			【新聞記事B】	
H3	形成				
I1	創造	トマト収量 通常の7倍越	効率, 利便性と安全性	【新聞記事A】	効率, 利便性と安全性
I2	考察			【新聞記事B】	
I3	考える・良くする				
J1	理解	待機児童対策ちぐはぐ	利便性と安全性, 適正な手続き, 自由・権利と責任	【新聞記事B】	持続可能性, 効率
J2	描写			(欠席)	
J3	探究			(欠席)	
K1	追究	待機児童対策ちぐはぐ	(無記入)	【新聞記事A】	利便性と安全性, 選択
K2	勉強			欠席	
K3	(欠席)			欠席	

(学生のアルファベットは同じグループを示している。1回目はグループ, 2回目はグループ内のペアで取り組んだ。)

【新聞記事A】の分析結果 作成者：学生C1・学生C2

関連する見方・考え方の視点	対立	利便性
見方・考え方の視点との関連性	<ul style="list-style-type: none"> ・タクシーの配車サービス競争の激化 ・タクシー業界以外の激化 ・ライドシェアの解禁によるタクシー業界の対立 	<ul style="list-style-type: none"> ・運転手の収入増加 ・客の時間減少
授業で扱える単元	「私たちと経済」	
児童・生徒との関係	<ul style="list-style-type: none"> ・将来、児童・生徒が実際に利用する可能性 ・スマホのアプリ普及による生活での利便性向上 	
記事の内容からつかませたいこと	<ul style="list-style-type: none"> ・技術によって生活の利便性を向上させる一方で、既存の社会システムとの対立を生む可能性がある。 	
授業で考えられる発問	<ul style="list-style-type: none"> ・「配車アプリの導入によって、どんな良いことと悪いことが考えられるか？」 ・「新しい技術を導入すると、それまでの技術やシステムはどうなってしまうだろうか？」 	

【新聞記事A】の分析結果 作成者：学生E1・学生E2

関連する見方・考え方の視点	利便性と安全性	機会費用
見方・考え方の視点との関連性	人工知能を活用した新アプリの導入などで利便性を高めようとしていること	アプリによる効率化
授業で扱える単元	情報化	
児童・生徒との関係性	今後、更に進んだ情報化社会で生活するであろう可能性が高いため、情報を取り入れ認識しておく	
記事の内容からつかませたいこと	情報化社会が進んでいくこと	
授業で考えられる発問	日本のタクシー業界で将来、ライドシェアが解禁されるのか	

【新聞記事B】の分析結果 作成者：学生A3・学生A4

関連する見方・考え方の視点	持続可能性	国際協調
見方・考え方の視点との関連性	このままのペースで海を汚し続けたらどうなるだろうか。今はあまり身近な問題ではないため、何も考えずプラスチックのゴミを出し続けることができるが、我々のこういったずさんな行動の被害を受けるのは我々ではなく、我々の後世である。どうしたら子孫をまもっていくことができるか。	プラスチックゴミによる海洋汚染問題により被害を最も受けるのは誰であろうか。汚しても自ら被害を受けない国もあれば汚していないのに被害を受ける海洋国もある。こういった社会、地理的不平等による問題の解決には国際的な協調が求められる。
授業で扱える単元	私たちの国際社会の諸課題	
児童・生徒との関係性	プラスチックは身近なものだが、それが海洋汚染に繋がっているとは考えにくい。世代的、又は国際的公正という視点から、この問題を、真摯に受けとめ、解決のために何が必要なのか考えさせたい。	
記事の内容からつかませたいこと	プラスチックが海洋汚染問題に繋がっているという事実。そういった問題と真摯に向き合い、対策を始めている国がいるという事実。日本では何ができるか、また、自分には何ができるかという問いを抱く。	
授業で考えられる発問	「プラスチックを減らすためにどうしたら良いだろうか」	

【新聞記事B】の分析結果 作成者：学生B3・学生B4

関連する見方・考え方の視点	持続可能性	交換
見方・考え方の視点との関連性	未来予測・今後、プラスチック製でないストローなどが日本をはじめ世界中でも普及してくるのか。経済コストは、プラスチック製のストローと同じ、または低くできるのか。環境などの、どのような社会的背景から代替品が生み出されるようになったか。	技術革新…石油とバイオテクノロジーへの転換。プラスチック製のストローが全面禁止になったことで、今まで生産に携わっていた人々の生活はどのように変化するのか。経済的先端地域の交代。
授業で扱える単元	政治・経済（高校）	
児童・生徒との関係性	<ul style="list-style-type: none"> ・大量消費社会と消費行動 ・将来の自分と環境問題 ・日本の企業と海外企業の競争・グローバル化 	
記事の内容からつかませたいこと	<ul style="list-style-type: none"> ・台湾でサトウキビが盛んな理由（植民地問題） ・石油産業から環境に良い、バイオテクノロジーへの転換 ・海洋汚染問題の深刻さ 	
授業で考えられる発問	<ul style="list-style-type: none"> ・記事の内容から20年後の日本はサトウキビストローや竹の皿が普及しているのか。（未来予測を生徒に） ／・1日に消費されるプラスチックの量は？➡石油の消費について考える。 ／・なぜ台湾でサトウキビの生産が盛んなのだろうか？ 	

本稿では、【新聞記事 A】と【新聞記事 B】を学生が分析したワークシートの記入内容の事例を、それぞれ二つずつ提示した。いずれの記事についても、一つ目は、よくできていると筆者が判断したものである。二つ目はこの活動について否定的な見解を持った学生（表 5 参照）が取り組んでいたワークシートの内容である。この活動の課題を明らかにするためにも、活動に否定的な見解をもった学生の活動結果を分析することは、意義があると考えられるため、分析の対象とした。

【新聞記事 A】のタクシーの配車アプリのニュースについては、「利便性と安全性」「効率」「対立」といった社会的な見方・考え方の視点を働かせながら読み解くペアが複数みられた。取り上げた学生 C1・C2, 及び, 学生 E1・E2 のペアの事例は、いずれも将来、児童・生徒が利用する可能性がある問題として配車アプリの事象を捉えており、「利便性」という視点に着目していた。その一方で、学生 E1・E2 のペアは、「機会費用」という視点に着目しているが、どのような点で「機会費用」に関連するののかについては十分に記述できない状態であった。

【新聞記事 B】のプラスチックの代替製品の開発にかんする記事については、ほとんどのグループが「持続可能性」という視点に着目し、複数のペアが「国際協調」という視点と関連付けて読み解いていた。取り上げた学生 A3・A4, 及び, 学生 B3・B4 のペアの事例は、いずれも「持続可能性」という視点と関連付けながら分析していた。学生 A3・A4 のペアは「世代的、又は国際的公正という視点」、学生 B3・B4 のペアは「台湾でサトウキビが盛んな理由（植民地問題）」という、いずれも新聞記事には直接言及されていない問題とも結び付けながら教材化を構想していた。

以上のように、ワークシート（図 2）を用いることで、ペアで協力しながらではあるが、多くの学生が社会的な見方・考え方を働かせながら時事問題について考え、教材化つなげることができていた。

4.2. 学生自身の捉えたニュースを読み解く活動の意義

第 3 回目の授業（10 月 17 日）では、【新聞記事 A】と【新聞記事 B】について分析した後に、こうしたワークシートをもとにニュースを読み解く活動は、どのような意義があったのか、あるいはなかったのか、について自由に見解を記述させた。記述の内容は、表 5 の通りである。

表 5 の内容から多くの学生がこの活動に肯定的な意義を見出していたことがうかがえる。多くの学生が共通してあげているのは、複数の視点で見られたこと（例：学生 A4「複数の視点から考えることで、より多様な思考ができる」）や、見方の深まり（例：学生 I2「意識的に見方・考え方を深めていくことで、その課題に対する問題意識が深まっていくのかなと思った」）であった。その他にも、学生 H3 は「教材化の視点は深まったと思う。新聞に授業で扱えるものがここまで多く載っているとは思わなかった」と述べ、新聞に着目することの意義そのものに気付いていた。また、学生 C3 は「見方・考え方を働かせることで他の事象との関りなどが見えやすくなる感じた。このようなことを意識しない中で教材化するのは難しいが意識作りができれば良い視点になるのではないだろうか」と述べ、意識化していく必要性に言及していた。学生 H1 は、「普段「社会的な見方・考え方」を意識して生活していなかった。でも、その視点を働かせることで、様々な角度から物事を考えることにつながると思った」というように、日常生活のなかで習慣化していくことの必要性にもつながる見解を論じていた。

一方で、この活動の課題についても学生の記述から考えていくことができる。視点がせばま

ってしまうことを危惧する見解が複数の学生の記述からみられた(例:学生E3「視点をしぼることで、その事象のとらえ方もせばまる」)。学生B4は、「内容知を築いてから学んだ知識・経験をコンピテンシーで整理・分類するのが望ましい」と論じ、この活動は「あまり意味や意義はない」と考えていた。実際に、学生B3・B4が【新聞記事B】を分析したワークシートの記述内容を見ると、台湾のサトウキビ生産の背景を植民地化の歴史と結び付けて理解することを重視していたことがうかがえる。台湾のプラスチック問題への対策(サトウキビの利用)にかんする記事を、植民地化の歴史と結び付ける上でも、まずは内容知が重要であるという見解を示していた。

また、学生E1は、「現行のままだと、ただ当てはまるものを探すだけの作業となってしまうと感じる。それぞれの視点を導くためのキーワードをもう少し意識する必要があるのではないか」と論じており、社会的な見方・考え方の視点に対する深い理解が重要であることに気付いていた。実際に、学生E1・E2が【新聞記事A】を分析したワークシートの記述内容は、「見方・考え方の視点との関連性」については、あまり記述されていなかった。

以上のように、社会的な見方・考え方の視点そのものへの理解や、社会事象についての広い知識がないと、社会的な見方・考え方を十分に働かせられない可能性があることが明らかになった。

表5 活動に対する学生の見解

学生	見解	記述内容
A1	○	「現代社会の見方・考え方」のフィルターを通して事象を捉えることで、対象とする物事の社会的な意義や成立の背景、これから先の在り方・変化などについて、より深く考えることができると感じた。
A2	△	子どもにとって難しい内容なら視点を与えた方が捉えやすくなると思う。読んでから視点を考えてもあまり意味はないと思う。
A3	○	考えさせたいことに軸を持たせることができるため、授業を考える場合に有効である。
A4	○	意識的に見方・考え方を働かせることは、その視点からしぼって考えることができ、複数の視点から考えることで、より多様な思考ができるため、意義のあることだと感じる。
B1	△	何も視点として捉えないよりは事象に対するアプローチ、目標や目的の明確化が図りやすいのではないかと感じる。こういった過程をないがしろにはいけないと思うが、難しい部分を感じたのも率直な所である。
B2	○	記事の内容について様々な立場の視点から考察することができた。
B3	○	ある問題や事象が様々な視点によって考えることができる点に気づけると思う。教材化の視点からは様々な視点の中から社会や子どもたちの実態(何を学んでほしいか)に応じて選択することで教材研究を深めることに繋がるのではないか。
B4	●	私はあまり意味や意義はないと考える。コンピテンシーベースが重要であるのは確かだが、先生も仰ったように「コンテンツベースだけでなくコンピテンシーベース」であるため、内容についてもしっかり理解する必要がある。よって内容知を築いてから学んだ知識・経験をコンピテンシーで整理・分類するのが望ましい。
C1	△	今回のような見方・考え方を働かせることは、社会の中で起きている事象を一つの枠組みの中

		で捉えるのには効果的だと思う。深い理解につながるかという点では、枠に当てはめる時点でその事象を一元的にしか見られなくなってしまう危険性を孕んでいると思う。
C2	○	理解が深まったと思う。ただニュースや記事を見るだけよりも何が問題なのか、どんなことが起こりうるかを考えた視点を通して、今まで以上に深く考えることができたから、そのため、やることに意義があると思う。
C3	○	見方・考え方を働かせることで他の事象との関りなどが見えやすくなると感じた。このようなことを意識しない中で教材化するのには難しいが意識作りができれば良い視点になるのではないだろうか。
C4	○	物事に対するテーマづけが明確であるので取っ掛かりについては理解がしやすいと思った。社会的事象について深く考える要因の一つとなりうるとともに他の単元や他の分野との関係について明確になるものだった。
D1	○	その事象がどういったものであるのかをより明確に把握するために欠かせないものであると感じた。
D2	○	現代社会の見方・考え方を働かせることによって、私たちの生きる社会に関心を持ち、よりよい社会にしたいという意欲や姿勢が養われる点で意義のあることだと思う。
D3	△	見方・考え方を定めてから活動に取り組んだ時に、そのフィルターにとどまった考えになってしまう恐れがある。しかしながら、そうはいつでも見方・考え方を働かせて取り組む思考をすることは重要であるので、定めさせるのではなく自らの思考と関連づけるような活動、システムにすれば良いのではないかと思う。
D4	○	視点を明確にすることでより考えが明確になると思う。またそこから違う視点へと広げていき、一つの事象を、多様な視点からも考察できるようになると思う。
E1	●	現行のままだと、ただ当てはまるものを探すだけの作業となってしまうと感じる。それぞれの視点を導くためのキーワードをもう少し意識する必要があるのではないか。
E2	○	見方・考え方の視点を設けることで、ただ記事を読むことよりは深まった読みをすることができると思う。普段いかに何も考えずに捉えているなと思った。
E3	△	(メリット) 視点が与えられることで思考に一貫性が生まれ深いところまで追究することができる。(デメリット) 事象を成り立たせる関連する視点が無視される。視点をしぼることで、その事象のとらえ方もせばまる。
F1	○	視点で考えていくことは大切。視点を持ちながら読み進めたりしていくことで考えの軸ができる。そのため、一人よがりではなく、筋の通った考えができるはずだ。
F2	○	授業づくりや主発問につなげやすくなった気がする。
F3		欠席
G1	○	社会への見方・考え方は深まっていると思います。色々から社会を見ることによって、新たな発見ができたのではないかと思います。
G2	○	深めていけると思います。様々な視点から社会事象を見れると思います。
G3	●	あまり意識する必要はない。普通に考えつく視点であり、その視点で見ることの方が多い
H1	○	普段「社会的な見方・考え方」を意識して生活していなかった。でも、その視点を働かせることで、様々な角度から物事を考えることにつながると思った。
H2	△	「社会的な見方・考え方」を働かせることは慣れていないとなかなか難しいと思った。常にそ

		のような視点をもつことで徐々に身につけていくものではないだろうか。
H3	△	教材化の視点は深まったと思う。新聞に授業で扱えるものがここまで多く載っているとは思わなかった。しかし、全国紙などだと生徒からは遠いことのように感じる記事が多く、授業で扱った後、自分達で考えを深めよう！とはならないかなと感じた。
I1	○	見方・考え方を働かせることで社会的な事象の課題を発見し、それを解決しようとする能力が養われるのではないかと思います。社会科教育では同じ視点でも子どものもつ意見は様々なので、多様性を生かした話し合いができればと思います。
I2	○	意識的に見方・考え方を深めていくことで、その課題に対する問題意識が深まっていくのかなと思った。また、自分達とはどのように関わっていくのかを考える為の機会にもなると思う。
I3	○	意識的に見方・考え方を働かせることは、社会に目を開け、色々な角度から物事を捉えることに繋がるという点で意味のある学習だと思う。
J1	○	情報を読み取る際に「現代社会の見方・考え方」に関する視点をはたらかせることで、この記事は何について書いているのか深く考えることができると思う。このような視点で見るのはなかなか難しかったが重要なことだと思う。
J2		欠席
J3		欠席
K1	○	事象について、ある点に着目して考えることができる。
K2		欠席
K3		欠席

(「見解」は筆者が記述内容を解釈し、活動を肯定的に捉える内容には○、否定的に捉える内容には●、肯定・否定の両面に言及しているものに△をつけた。)

5. 本研究の成果と今後の課題

以上のように、本稿では、日常生活での実践習慣に重点をおいた教員養成・教員研修の意義と可能性を検討した。具体的には、社会的な見方・考え方を身につける教員養成・教員研修の活動(「社会的な見方・考え方」を活用しながらニュースを読み解く教材開発シート)を提案し、教員養成での授業実践を通して、その効果と課題を明らかにした。

本研究で開発したワークシート「社会的な見方・考え方」を活用しながらニュースを読み解く教材開発シート(図2)は、ニュースを読み解くという日常生活における社会行為を、授業の教材開発へと結び付ける視点を有していた。実際にこのワークシートを活用した教員養成の授業実践では、学生が社会的な見方・考え方の視点と関連付けながら時事問題を読み解き、教材化する着想を得ていた。同じ日付の新聞や、同じ新聞記事でも、学生によって捉え方が異なっており、学生同士が議論しながら取り組むことで、時事問題への着目の仕方や教材化の視点が多様にあることを学びとっていた。また、こうした学習の振り返りでは、社会的な見方・考え方と関連させながら意識的に時事問題を読み解くことでその社会的課題に対する問題意識が深まることや、日常生活の中でニュースを読み解く習慣を身につけることが重要であることについて、気づきを得ていた。

こうした成果の一方で、本稿で提案した時事問題を読み解く活動の課題も明らかになった。第一に、今回の活動で複数の学生が難しさを感じていたように、社会的な見方・考え方の視点

そのものへの理解や、社会事象についての広い知識がないと、社会的な見方・考え方を十分に働かせられない可能性があることである。第二に、社会的な見方・考え方を働かせることが逆に縛りとなってしまい、当てはまる視点を探すだけの作業に陥ってしまう危険があることである。社会的な見方・考え方の視点そのものについては、Center for Civic Education (2001) や吉本佳生・NHK「出社が楽しい経済学」制作班編(2009)など、いくつかの視点について理解を深めることのできる書籍が出版されている³。今後は、有効に社会的な見方・考え方を働かせられるようにするために、どのような段階を経ながら学習する必要があるのかを検討していく必要がある。

以上のように、本研究では、教員養成での授業実践を通して成果と課題を検討したが、ニュースを読み解く活動は、現職教員の研修の場でも応用できると考えられる。

実践の課題も含めて明らかにしたことが本研究の成果である。ただし、本研究では、次の二点が検討できていないままでおり、重要な課題として残されている。第一に、今回の活動が本当に実践習慣として身体化されたのかということである。今回の教員養成の授業で活動した学生が、授業終了後や、教員採用後も、引き続き、ニュースを読み解くことを教材開発につなげているのか否かについては、今後、検証していく必要がある。こうした検証が難しい場合は、時事問題に着目しながら教材化をしている教師のライフストーリーを分析し、どのような社会科教師としての実践習慣を、どのような経緯から身につけているのかを明らかにしていく必要がある。

第二に、教師が社会的な見方・考え方を働かせながら時事問題を読み解き、教材化に結び付ける実践習慣を身につけることができたとしても、それが、実際の授業や、子どもの学びにどのようなつながるのかを明らかにできていない点である。教員養成・教員研修の成果をどのように測るのかという難しい課題とも関連するが、真の意味で意義のある教員養成・教員研修の活動であるというためには、教師の学びが子どもの学習にどのような影響をもたらすのかを明らかにしていく必要がある。

以上の二点は、今後の課題である。

注記

- 1 「実践習慣」という語句は、社会学のハビトゥスから着想を得て、筆者が定義した。『社会学小辞典』によれば、ハビトゥスとは、「社会化過程のなかで習得され、身に付いた一定のものの見方・感じ方・振舞い方などを持続的に生み出していく性向」のことである(濱嶋・竹内・石川編, 1997, p.505)。ピエール・ブルデュー(1990)は、文化的再生産を説明する際に、身体化された文化資本としてハビトゥスという概念を用いた。文化資本とは、「個人または集団がそれぞれの社会的活動の場(学校教育, 職業生活, 社交, 文化・芸術活動等々)において有する文化的有利さの可能性の大小」のことである(濱嶋・竹内・石川編, 1997, p.547)。ピエール・ブルデュー(1986)は、文化資本を三つの形式に分類している。それは、身体化された様態, 所有物などの客体化された様態, 資格などの制度化された様態の三つである。身体化された様態としての文化資本とは、知識や技能をはじめ、身につけられたものであり、ハビトゥスもこれにあたる。ハビトゥスには、「慣習行動を通して多かれ少なかれ反復され、一定の時間をかけて「身体化」されている」という特性がある(石井, 1993, p.134)。そのため、「行為者の身にしみついている種々の思考・行動様式のシステム」とし

て「存在と化した所有」であるといえる(石井, 1993, p.135)。ピエール・ブルデュー(1990)の書名にもなっている「ディスタンクシオン」とは、他者と自己を区別すること、さらには、自己の卓越化を意味する言葉である。こうしたハビトゥスの差異が、社会空間に個人を位置づけ、他者と自己を区別し、ある個人を卓越化させる。家庭教育や学校教育で文化的慣習行動が形成され、階級構造を再生産するメカニズムになっている。ピエール・ブルデューの論の核心そのものは、こうした文化的再生産の問題に向けられたものである。また、ピエール・ブルデューは、無意識のうちに行っているものとして慣習行動という語句を用いている。そのため、ハビトゥスについても、出身階層とも密接に関連しながら家庭教育や学校教育のなかで無自覚のうちで修得されると考えられる。本稿では、ハビトゥスから着想を得ながらも、文化的再生産を主題にしているわけではない。また、ハビトゥスとは異なり、より自覚的・意識的に身に付ける(身体化する)ものとして「実践習慣」という言葉を定義して用いた。

- 2 例えば, R.リチャート・M.チャーチ・K.モリソン(2015)では, 子どもの思考が見える21のルーチンが紹介されている。
- 3 Center for Civic Education(2001)では, 権威, プライバシー, 責任, 正義について, 身近な事例を通して理解を深めることができる。また, 吉本佳生・NHK「出社が楽しい経済学」制作班編(2009)では, 機会費用をはじめ, 経済に関連の深い見方・考え方について日常生活での身近な事例を通して理解を深めることができる。

謝辞

本研究は, JSPS 科研費 JP18K13155 の助成を受けたものです。

引用文献一覧

- 有田和正(2009)『教え上手』サンマーク出版。
- 有田和正(2015)『名著復刻 教材発掘の基礎技術』明治図書。
- 石井洋二郎(1993)『差異と欲望』藤原書店。
- 角田将士(2013)「小学校教員養成における社会科授業構成能力の育成—教師のゲートキーピング論を手がかりに—」『立命館産業社会論集』第48巻第4号, pp.147-158.
- 川口広美(2014)「教師による社会系教科カリキュラム設計方法論の構築—高校日本史カリキュラム開発共同研究を事例として—」『社会科研究』第80号, pp.9-20.
- 教育課程部会 社会・地理歴史・公民ワーキンググループ(2016)「社会・地理歴史・公民ワーキンググループにおける審議の取りまとめについて(2)」https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/09/12/1377052_02_1.pdf(最終閲覧日2019年12月1日)
- 草原和博・岡田了祐・渡邊巧・大坂遊・阪上弘彬・岩下真也・上嶋智江・小川征児・木坂祥希・魏思遥・佐々木拓也・辻本成貴・寺嶋崇・山田健司・杠拓哉(2016)「社会科授業力改善ハンドブックの開発と評価—教員養成・教員研修の場で活用できる教材の構成—」『学校教育実践学研究』第22巻, pp.181-192.
- 坂井俊樹研究代表(2010)『小学校社会科授業の実態調査に関する研究—東京都を中心に—』(2009年度 東京学芸大学・重点研究費)

- 田口紘子・溝口和宏・上谷順三郎 (2015) 「小・中学校, 高校・大学における新聞活用・読解に関する調査結果の分析」『日本NIE学会誌』第10号, pp.17-25.
- 田口紘子・溝口和宏・田宮弘宣 (2009) 「実践的な力量形成を実現する教員研修モデルカリキュラムに関する研究—「社会科授業実践力診断カルテ」の開発を通して—」『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』19巻, pp.13-22.
- 棚橋健治・渡邊巧・大坂遊・草原和博 (2014) 「教員志望学生の社会科授業プランになぜ違いが生じるのか: 教科指導力の育成のあり方に示唆するもの」『学校教育実践学研究』20, pp.125-139.
- 濱嶋朗・竹内郁郎・石川晃弘編 (1997) 『社会学小辞典[新版]』有斐閣。
- ピエール・ブルデュー, 石井洋二郎訳 (1990) 『ディスタンクシオン I』藤原書店。
- ピエール・ブルデュー, 福井憲彦訳 (1986) 「文化資本の三つの姿」『アクト actes』No.1, pp.18-28.
- 松尾正幸 (2001) 「社会科教師とその教員養成の研究」全国社会科教育学会編『社会科教育学研究ハンドブック』明治図書, pp.162-169.
- 溝口和宏・田口紘子・田宮弘宣 (2010) 「実践的な力量形成を実現する教員研修モデルカリキュラムに関する研究(2): 「社会科授業実践力診断 カルテ」の活用と検証を通して」『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』20巻, pp.25-36.
- 村井大介 (2018) 「現代社会の諸課題の解決と社会への構想につながる見方・考え方の育成—資質・能力から社会への希望を視点にした実践的な習慣の形成へ—」江口勇治監『21世紀の教育に求められる「社会的な見方・考え方」』, pp.264-273.
- 吉本佳生・NHK「出社が楽しい経済学」制作班編 (2009) 『出社が楽しい経済学』NHK出版。
- R.リチャート・M.チャーチ・K.モリソン, 黒上晴夫・小島亜華里 (2015) 『子どもの思考が見える21のルーチン』北大路書房。
- Center for Civic Education, 江口勇治監訳 (2001) 『テキストブックわたしたちと法—権威, プライバシー, 責任, そして正義』現代人文社。